HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サッカーの戦法とシステムの歴史的発展に関する再考察
Author(s)	佐藤, 亮平
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 123, 119-139
Issue Date	2015-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.123.119
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60571
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452-123 (11).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

サッカーの戦法とシステムの歴史的発展に関する再考察

佐　藤　亮　平*

【要旨】 本研究は，サッカーの戦法・システムの歴史的発展を再考察したものである。研究方法はイギリスの研究成果に学び，1850年以降を検討対象とした。1850年代から1925年の期間は，地域ごとで異なるフットボールが行われていた。それが，FAカップをきっかけに，徐々にパスサッカーへ集約されていった。このパスの重要性とルール改正により，役割を明確にする攻守分業型のシステムの構築が示された。この分業型システムを崩すために中盤の役割が重要視され，その役割が選手全体へ波及していく全員攻撃・全員守備の萌芽が1950年に生まれ熟成された。そして，1980年代末にゾーンプレス戦術が導入され，時間的・空間的余裕の無い戦いが展開される守備と攻撃の一体化が生まれ，サッカーは高速化していった。先の傾向が続く中で，2008年にボールポゼッション戦術を基調とした攻守一体型の現代サッカーのシステムが誕生した。このような変遷がどのような意味を持つのかを検討した。
【キーワード】サッカー，戦法，システム，歴史的発展

1．緒言

本稿は，サッカーの歴史的発展過程に関する一考察である。この歴史的考察に至った経緯をまず述べておきたい。

筆者は，これまでサッカーの指導方法に関する諸課題をテーマに研究を進めてきた。その中で，サッカーの技術・戦術構造の解明，指導内容と方法の順次性の指標の一つとして，サッカーの歴史的発展過程に関する文献を調査・検討してきた。その結果，日本のサッカー発展史の把握には，次のような課題があるように思われた。

一つは，日本におけるサッカーの歴史に関する先行研究が，1863年にイギリスにおいて設立された世界最古のサッカー協会（以下，FA）を中心に歴史的発展を描いていることである。もう一つは，初期の戦法の発展を「マス・ドリブル戦法」－「キックアンドラッシュ戦法」－「ロングパス戦法」－「ショートパス戦法」という順で発展してきたとしているが，これは第一のFA中心の発展史観によるものではないかということである。そして，三つめは，「システム」の発展が通史としての記述にとどまっていることである。つまり，「システム」については，詳細に記述がされているが，サッカーの発展史全体として，その発展過程内に生じる「解決課題」と「システム誕生」の関係が，充分に考察されていないということである。それは，「戦法」についても同様のことがいえる。すなわち，サッカーの初期における「戦法」が，その後に出現する「システム」との関わりの中で，どのような質的な発展が促されているかが，明確になっていないこということである。この点については，先述したFA中心の発展史観が影響し

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程
DOI：10.14943/b.edu.123.119

ていると考えている。

このような課題意識を持った背景には，イギリスにおける研究成果（Harvey，2001；Taylor2012）において，FAが組織される1863年以前にロンドン以外の地域にもフットボール文化が存在していることを指摘していることにある。つまり，従来示されてきた「戦法」が段階的な発展段階を示すのではなく，並列的な存在として位置づけられる可能性があり，「戦法」の発展について新たな視点を提示することができるのではないかということである。したがって，サッカーの「戦法」の発展を検討するためには，FA以外の地域において，どのようなフットボールが展開されていたかについても検討する必要があるといえる。そして，これらの検討を踏まえ，「戦法」の発展過程を把握した上で，1925年以降の「システム」の発展過程における「解決課題」と「システムの誕生」を再検討し，サッカーの発展を「解決課題」の質的な相違を基に段階的に区分することが本稿の目的である。その具体的な内容は，各段階におけるサッカーのゲームにおける解決課題とその課題を解決するための「システム」の発展，その段階における「戦法」と「システム」の関係性，特徴的な技術・戦術について考察することである。

対象期間は，イギリスにおける研究成果を参考に1850年代以降から現代サッカーに至るまでの戦法及びシステムを検討対象とする。

2．研究方法

研究方法は文献研究で，これまでの先行研究の成果に基づいて，戦法やシステムの特徴について考察する。主な引用文献は，ジョナサン・ウィルソン：野間けい子訳（2010）サッカー戦術の歴史，多和健雄ほか（1974）サッカーのコーチング，日本サッカー協会（2008，2010，2012）テクニカルレポートであり，以下に示すものも参照した。

Harvey，A（2001）*Football in Sheffield and Creation of Modern Soccer and Rugby*，Harvey，A（2005）*Football: The First Hundred Years The Untold Story*，Taylor，M：池田恵子訳（2012）*Eton versus Sheffield*，Muray（1996）*The World's Game*，Mason，T（1980）*Association Football and English Society 1863-1915*。

なお，本研究における「戦法」，「システム」という用語については，次のように規定したい。「戦法」という用語は，「作戦，戦略，戦術を含んだ試合や競技における戦いの進め方」というように（内山，1996，p. 41），戦術や作戦といった概念よりも広範な概念規定が一般的にされている。しかし，本研究において参照している文献等では先述した概念規定というよりも，サッカーの戦い方の基本的な形態，すなわち，ゲームを進める上での「基本的方法」という意味と捉える事が妥当であると思われる。それは，歴史的発展過程に関する研究に記述されている「戦法」の内容が，基礎・基本的な攻撃方法を示しているからである。そのため，本研究における「戦法」という用語は，従来の「戦法」という意味ではなく，「サッカーの試合を進める上での基本的方法」として記述したい。「システム」は，「多くの要素が互いに関連を持ちながら，全体としての共通の目的を達成しようとしている集合体」というように全体が相互関連しながら共通の目標に向かって行く集合といった概念規定がされている（大村，1971，

p. 13)。一方，球技ではデーブラー（1985）が，システムについて「空間的・時間的に打ち出されたチームプレーの実施の基本形態」であり，「フォーメーションならびに攻撃と防御における役割に現れる」としている（デーブラー，1985，p. 268)。このことからも，「システム」は単なる数字の羅列や人の配置を示しているのではなく，試合におけるチームプレーの方向性あるいは攻守における目的を達成するための選手個々の役割といった意味を内包している。そのため，本研究では「システム」という用語を「攻撃・守備におけるチームプレーの総合的な計画の実施形態」という意味で使用したい。

3．サッカーの戦法及びシステムの歴史的発展過程に関する仮説的概要

ここでは，1850年代から現代におけるサッカーの戦法及びシステムの発展について，5段階に分けて概観していく。

第1段階は，1850年代から1925年までのイギリス各地でプレーされていたフットボールのいくつかの「初期の戦法」が同時代的に存在し，やがてＦＡカップを通して，ロンドンの「ドリブル戦法」中心のゲーム展開から北部やスコットランドを中心とする「パスサッカー」を中心としたゲーム展開に集約されていく段階である。

第2段階は，戦法が「パスサッカー」へ集約されていくと，「システム」が生み出され，1925年のオフサイド・ルールの改正も相まって，ポジションに応じたプレーヤーの役割が明確化され，攻守の分業制を基本とするシステム間の攻防が発展する段階である。

第3段階は，そのシステムにおいて，1950年以降に攻撃と守備をつなぐ中盤の選手の役割が重視され，４－２－４システムが誕生し，それ以降すべての選手の役割が攻守両面にわたるようになってくる段階である。

第4段階は，1980年代末に導入されたゾーンプレス戦術によって，フィールドにおける時間的・空間的余裕の無いプレーが要求され，素早い判断力と強靭な身体による試合が展開されていく段階である。

第5段階は，現在進行しつつあるサッカーで，攻撃を展開する中で守備の組織を整えていくという「攻撃と守備の一体化」に向かう段階と位置づけることが出来る。以下，この4段階と5段階を一項として捉え，4項に分けて叙述していく。

3－1．初期の戦法

1）ロンドン近郊におけるサッカーの発展

1850年以前からサッカーの前身であるフットボールは，各地で様々な形式で行われていた。しかし，この当時には明文化された統一ルールが無く，地域ごとに違ったルールで，プレーされていた。そのため，対外試合を行うためには，両チームの主将による話し合い等によって，ルールの擦り合わせを行うことが必要であった。このようなことから，ロンドン近郊では，パブリックスクールの学生を中心に統一ルールを作成しようとする動きが生じてくる。そして，1863年にFA（Football Association）が設立され，ルールが明文化された（表1）。

しかし，当時のルールにおいては，サッカーの特徴である手の使用の禁止が明示されず，コー

トの大きさも現代と比べ大きかったり，オフサイド・ルールが「ボールより前に出てはいけない」という攻撃に対する規制が強かったりと「サッカーらしい」と言えない条項も含まれていた。そのため，1866年には攻撃者の自由度を高めるため，「オフサイド・ルール」が改正（3人制）された。しかし，このような攻撃者のプレーの自由度を高めるルール改正が行われたにもかかわらず，1860年代におけるロンドンでは「ドリブルゲーム」が主流であったされている（ジョナサン，2010，p. 21)。その理由についてジョナサン（2010）は，「目標に向かって直接突進する以外のことは男らしくないと確信しているイングランド人の考え」が影響しているとし，ボールを持ったら男らしく，ドリブルで相手ゴールに向かっていくという精神の下，ゲームが行われていたとしている（同前，p. 23)。さらに，前方の味方へのパスが容認された3人制オフサイドにルールが改正された後も，「ドリブルゲームで育ってきたものにとっては，大きな違いはなかったようだ」とし，ドリブルが中心のサッカーがロンドン近郊で行われていたと述べている（同前，p. 24)。これらのことは，当時のFAの事務局長であるチャールズ・オルコックが，この当時のサッカーにおける有効な技術がドリブルであると考えていたことからもうかがえる（Harvey，2005，p. 213)。さらに，Harvey（2005）は，1883年にオックスフォード大学によって，当時におけるモダンな戦術（ショートパス戦法あるいはロングパス戦法）がロンドンに導入されていったことを報告している。このように，1850年から1883年までのロンドンでは，「ドリブル中心」のゲームが展開されていたと考えられる。

表1　1863年のFAのルール（多和ほか（1974）を参考に筆者が作成）

条	ルールの内容
1	グラウンドの長さは、最大を200ヤード（約180m）とし、幅は最大を100ヤード（約90m）とする。 グラウンドの大きさは旗を立てて標示する。 ゴールは8ヤード（約7m）の間隔に直立させた2本のポストで、ポストを横切るテープもバーも使用しない。
2	トスの勝者はゴールを選択する。 ゲームの開始は、トスに負けた側がグラウンドの中央から行うプレースキックによって始める。 他のサイド、ボールがキックオフされるまで、ボールから10ヤード（約9m）以内に接近してはならない。
3	得点の後は、ゴールを代え（サイドを代え）、失点した側がキックオフを行う。
4	得点は、ボールが両ゴールポストの間またはその延長上の空間（どのように高くとも）を通過したら認められる。 ただし、手で投げられたり、運んだ場合は得点にならない（注、蹴り入れたときのみ認められる）
5	ボールがタッチに出た場合には、ボールに最初に触れたプレーヤーが、ボールがグラウンドを超えた所のバウンダリーライン上から、バウンダリーラインと直角にグラウンドに投げ入れる。 投げ入れたボールが、グラウンドにふれるまでは、インプレーにならない。（注、投げ方はクリケットのように、片手で頭上を越して投げる）
6	ある、プレーヤーがボールを蹴ったとき、ボールよりも相手のゴールラインに近い位置にいる味方プレーヤーは、プレーに参加してはいけない。すなわち、相手側のプレーヤーがそのボールをプレーするまでは、ボールにふれたり、相手側がボールにプレーしようとするのを妨げてはいけない。 ただし、ボールが味方のゴールライン後方から蹴られる場合は、前項のルールに関わりなく、どのプレーヤーでもプレーできる。 （注、これがオフサイドルールの原形であって、このルールでは、ボールの前方でのプレーは不可能となる）
7	ボールがゴールラインの後方に出た場合、そのゴールを守る側のプレーヤーが、出たボールを最初に押さえた 場合には、ボールを押さえた地点に対向したゴールライン上からフリーキックを行う権利が与えられる。 もしも、攻撃側のプレーヤーが、出たボールを最初に押さえた場合には、押さえた地点に対向するゴールラインから15ヤード（約13.5m）離れた地点にボールを置いて、ゴールに向かってフリーキックを行う権利が与えられる。この場合、相手側はキックが行われるまで、ゴールラインの後方に立たたなければならない。（注、フリーキックとは、相手の妨害なしにボールを蹴る権利をさすことば。）
8	ある、プレーヤーがフェアチャッチをした場合、ただちに踵で地面にマークすれば、フリーキックの権利が与えられる。このフリーキックを行うために、キッカーは好きなだけ退がることができる。この場合相手側は、キックがなされるまでマークを越えて前進することはできない。
9	ボールを手に持って運ぶことは禁止される。
10	トリッピングをすること、ハッキングをすること、手で相手をつかまえたり押したりすることは禁止される。
11	ボールを他のプレーヤーに投げたり、パスしたりすることは禁止される
12	いかなる理由にもせよ、インプレーの間に、グラウンド上のボールに手で触れることは禁止される。
13	プレーヤーが、フェアチャッチをするか、または最初のバウンドのボールをチャッチしたときは、ボールを投げてもよいし、他のプレーヤーにパスをしてもよい。
14	プレーヤーは、靴の裏または踵に、突き出した釘、鉄の板、あるいはガタパチャーとよぶ弾力のないゴムの 一種をつけることはできない

2）ロンドン以外の地域におけるフットボール文化

同時期のイングランド北部のシェフィールド地域では，シェフィールドFC[1)]を中心にロンドンとは異なる方法でサッカーが行われていたと考えられる。その理由としてジョナサン（2010）は，シェフィールドの選手たちがヘディングの練習をしていたことにあるとしている（ジョナサン，2010，p. 26）。ヘディングの練習とは，高く浮いたボールを処理するために必要なものである。しかし，ドリブル中心のサッカーではヘディングする程，高くボールが浮きにくいゲーム展開であると推察できる。そのため，シェフィールド地域で行われていたサッカー文化には「パスを出す文化はなかったかもしれないが，ロングパスを蹴ってラインをクリアする」といったキックを中心としたゲームを展開していた可能性があったと考えられる（同前，p. 26）。すなわち，この地域ではロンドンと同時期にキッキングサッカーが展開されていた可能性があると考えられる。また，Mason（1980）は，パスサッカーのパイオニアとして，シェフィールドFCとクイーンズ・パーク・クラブを位置づけており（Mason，1980，p. 208），イギリス北部では「パスサッカー」が展開されていた可能性があると考えられる[2)]。また，Harvey（2005）は，シェフィールドが，FAの 3 人制オフサイドが導入された際にも，影響を受けなかったとし，その背景にはドリブルよりもパスゲームが発展していたことを挙げている（Harvey，2005，p. 213）。すなわち，シェフィールド地域では「キックアンドラッシュ」や「ロングパス」を用いた「パス中心」のゲームが，行われていたと考えられる。

さらに，同時期のスコットランドでは，クイーンズ・パーク・クラブが1870年にFA加盟する時には，すでにパスがドリブルよりも優れているという認識を持っていた可能性があり，パスというアイディアを持っていたとされている（ジョナサン，2010，p. 27）。さらに，クイーンズ・パーク・クラブの最初に導入したオフサイド・ルールは，「選手が奥から二番目の選手を越え，かつピッチの最後の十五ヤード内にいるときはオフサイドになる」というものであり，ルール上においてもパスが可能な設定である（同前，p. 28）。そのため，スコットランドではパスサッカーが行われていた可能性があると考えられる。このパスサッカーの中身について，Murray（1996）は，スコットランドのフットボールは，ショートパスを交換し，グラウンド上にあるボールをキープするものであったとしている（Murray，1996，p. 7）。また，Harvey（2005）も，グラスゴーのクラブチームであるクイーンズ・パークがショートパスを用いていたことを報告している（Harvey，2005，p. 213）。このように，同時期のスコットランドでは，「ショートパス」を中心としたサッカーが展開されていたということである。

3）FAカップの創設と地域クラブの参入

このように，1850年代から1860年代におけるサッカーは，ロンドン，シェフィールド，スコットランドといった地域によって様々な戦法が存在していた可能性を見てきたが，1871年に創設されたFAカップへ各地域のクラブが参入することにより，次第に戦法が洗練化されていく。

『フットボールの歴史（2004）』によると，FAカップに参加するためには，FAに所属することが必要であり，1871-1872シーズンは15チームの参加しかなかったが，1878-1879シーズンには43チーム，1883-1884シーズンには100チームを超える大会になっていったこと，1879年にはFAカップが重要な大会として位置づけられていたことを示している（クリスチャン・エイゼンベルグほか，2004，p. 18）。

また，表 2 から，FAカップ開催当初はロンドン近郊のチームが優勝していたが，1883年を

境に優勝チームの出身地域がロンドン以外になっていったことがわかる。このような優勝チームの変化から，ジョナサン（2010）はドリブルゲームが1883年に終焉を迎えたとしている。その1883年の試合では，逆サイドに弧を描くロングパスを送るブラックバーン•オリンピック（イングランド北部のチーム）の見慣れない戦法に対し，イートンニアンズ（ロンドン，イートン校の卒業生チーム）が対応できず敗戦し，大会史上初めて優勝杯がイギリス北部に持ち帰えられたことを報告している（ジョナサン，2010，p. 32)。加えて，Mason（1980）は，1880年代中盤にはイギリスにおいてパスサッカーが中心となっていることを報告していることからも（Mason，1980，p. 208），1880年代前半を境にサッカーの試合において「パス」が優位性を持つことが広く認識されるようになったと考えられる。

表 2　FAカップの1872年から1890年までの優勝チームと出身地域
（FAの資料，Mason（1980）を参考に筆者が作成）

大会	対戦		スコア	日時
	優勝	準優勝		
1	Wanderers	Royal Engineers	1 − 0	16/03/1872
2	Wanderers	Oxford University	2 − 0	29/03/1873
3	Oxford University	Royal Engineers	2 − 0	14/03/1874
4	Royal Engineers	Old Etonians	1 − 1	13/03/1875
再試合	Royal Engineers	Old Etonians	2 − 0	16/03/1875
5	Wanderers	Old Etonians	1 − 1	11/03/1876
再試合	Wanderers	Old Etonians	3 − 0	18/03/1876
6	Wanderers	Oxford University	2 − 1	24/03/1877
7	Wanderers	Royal Engineers	3 − 1	23/03/1878
8	Old Etonians	Clapham Rovers	1 − 0	29/03/1879
9	Clapham Rovers	Oxford University	1 − 0	10/04/1880
10	Old Carthusians	Old Etonians	3 − 0	09/04/1881
11	Old Etonians	Blackburn Rovers	1 − 0	25/03/1882
12	Blackburn Olympic	Old Etonians	2 − 1	31/03/1883
13	Blackburn Rovers	Queen ‘s Park (Glasgow)	2 − 1	29/03/1884
14	Blackburn Rovers	Queen ‘s Park (Glasgow)	2 − 0	04/04/1885
再試合	Blackburn Rovers	West Bromwich Albion	0 − 0	03/04/1886
15	Blackburn Rovers	West Bromwich Albion	2 − 0	10/04/1886
16	West Bromwich Albion	Preston North End	2 − 1	24/03/1888
17	Preston North End	Wolverhampton Wanderers	3 − 0	30/03/1889
18	Blackburn Rovers	Sheffield Wednesday	6 − 1	29/03/1890

注）優勝及び準優勝チームの出身地域
南部：Wanderers, Royal Engineers, Old Etonians, Oxford University, Clapham Rovers, Old Carthusians
中部：West Bromwich Albion, Wolverhampton Wanderers
北部：Sheffield Wednesday, Preston North End, Blackburn Olympic, Blackburn Rovers
スコットランド：Queen‘s Park（Glasgow）

4）初期戦法の発展が意味するもの

このように，1850年代から1880年代までの初期のサッカーは，ロンドンの「ドリブル中心のサッカー」，シェフィールドの「キッキングサッカー」，スコットランドにおける「ショートパスサッカー」というように地域によって多様な戦法であったことが示唆される。そのため，従来の先行研究のドリブル戦法からキックアンドラッシュ戦法へ，さらにロングパス戦法から

ショートパス戦法へ発展するという段階的発展ではなく，初期の戦法は，ルールの違いや地域性により多様な形態で存在し，これらの戦法が試合（FAカップなど）を通じて試され，「パスサッカー」に集約されていったのではないかと考えられ，これらの戦法は，同時並存的発展だったのではないかと考えられる。

このことは，サッカーというスポーツの基本となる技術・戦術が多様な実践的試みの中で生み出されたことを示しており，サッカーの試合における戦い方の基本形態になっていったことを示しているといえる。すなわちそれは，ドリブルという技術とその戦術的使用によって得点に結び付けるドリブル型，ロングボールを後方から前方へ蹴る技術とそれを走り込んでシュートに結びつける逆襲型，あるいはサイドから中央の味方選手へセンタリングを送るサイド型，パスを媒介としたコンビネーションプレーによって局面を打開するパス型といったサッカーの基本となる戦法を生み出す土台になったと言うことである。

さらに，これらの戦法において中心的な役割を担うと考えられるキック，トラップ，ドリブルといった技術も，戦法や戦術とのかかわりで身に付けることによって，試合に生きたものになることを示している。

このように，多様な戦法の交換の中で初期サッカーは，「パス」をどのように使うのかを中心課題とする段階に向かっていく。そこでは，システムの構築の必要性が促されていく。

3－2．攻守分業化

1）システムの登場

上述した「パス」を中心としたサッカーが，次第に優位性を持ってくる中で登場するのが，「ピラミッドシステム（2－3－5システム）」である（図1）。

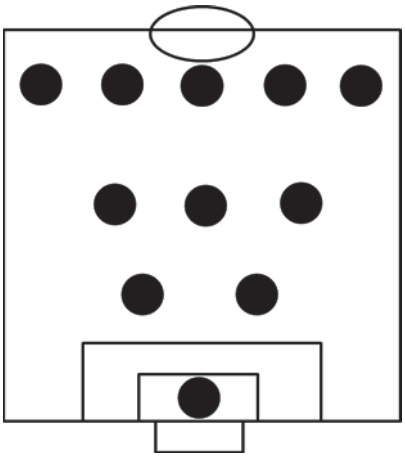

図1　ピラミッドシステム

このシステムでは，当初は一直線に並んでいた「フォワードの5人がW字形に位置し，その後ろに3名のハーフバック，ペナルティーエリア近くの左右に位置した2名のバック，その後ろにゴールキーパーという配置のピラミッド形の布陣」が特徴であり，このシステムは「フォ

ワード同士のパス，フォワードバック間のパスが可能となりバランスのとれた攻撃・守備を目指した」システムであった（多和，1974，p. 106)。実際の試合場面では，「5名のフォワードにセンターハーフが加わって6名で攻め入ること」「相手フォワードを3名のハーフバックがマークし，2名のフルバックはペナルティーエリア内に待っていてゴール前を固めている」ことが特徴であり，ポジションによって攻撃と守備が分業化されている（同前，p. 106)。ピラミッドシステムおいては，「カバーリングで守備を堅固」にしていることから，カバーリング戦術がグループ戦術として取り入れられ，これが基礎となり「『ゾーンディフェンス』の基本である分担地域防御を生み出した」事が，近代サッカーに影響を与えている（同前，p. 106)。このゾーンディフェンスの完成度が高まるにつれ，得点が減少していったことから，多和（1974）は，当時のサッカーは「攻撃力よりも守備力が優っていた」と述べている（同前，p. 106)。

このように，ピラミッドシステムの完成により，守備側が優位になり得点率が減少したため，1925年には，攻撃側に配慮したオフサイド・ルールの改正がなされ，現行のルールと同様の2人制になった。このオフサイド・ルールの改正により，得点の機会をより多く生み出しゲームをより面白くすることになったが，その一方で，ディフェンスはこれまでのように2人でゴールを守ることが困難になった。そこで，アーセナルのハーバート•チャップマンは，従来の「2－3－5システム」の3の中央の選手（センターハーフ）をディフェンスに下げ，3バックシステムの「W・Mシステム」を誕生させた（図2)。

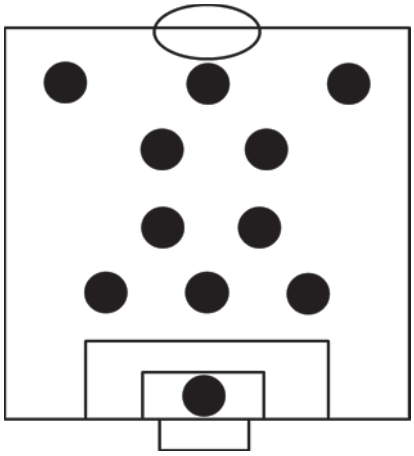

図2　W－Mシステム

この「W・Mシステム」は，キーパーから見て，W字型のポジションの5人で守備をし，M字型の前線の5人で攻撃を展開するという「攻守分業制」のシステムであった。このシステムの特徴的な点は，「攻守分業制」という新たな観点から，「守備」局面において，守備者が行うべき役割が明確にされ，攻撃者5人対守備者5人の数的同数をクローズドマークの「マンツーマンディフェンス」を用いて守備戦術を構築した点である。これにより，攻撃者は守備者からプレッシャーがないフリーな状態で，ボールを味方から受けることが困難になり，攻撃を展開

しにくくなったと考えられる。

また，この時期にオーストリアでは，カール・ラッパンが「W・Mシステム」をベースにした「ボルト・システム」を生み出している。この「ボルト・システム」が生まれてきた背景には，当時（1938）ラッパンが指揮していたチームがセミプロであり，「完全なプロチームには体力面でかなわないという事実を埋め合わせるため」に考案したシステムであるとされている（同前，p. 214）。そのシステムの特徴は，「ウイングハーフの二人が下がってフルバックの外側に位置をとる」事により，「結果的にフルバックの二人はセンターバック」とすることである（同前，p. 214）。このセンターバックとなったフルバックの選手は，横に並びフラットなポジショニングをとるが，ボールの位置に応じて，カバーリングを行い，理論上は，常に予備の選手が一人いるというシステムであった。この予備の選手は「ヴェレール」と名のついたポジションで，のちにリベロと呼ばれる守備を中心としながらもチャンスがあれば攻撃に参加する自由性の高いポジションであった。このシステムでは，「スイーピングバック」の役割を「前方のディフェンスラインを抜けて攻め込んでくる相手に対し，いつでもアタックできる体勢を整える」ことと，状況に応じて「前で相手に抜かれたバックが後方に下がるのを待ってタックルに入ったりしてゴール前を固く守る」事であった（多和，1974，p. 110）。また，多和（1974）は「ボルト・システム」が，「インサイドフォワードの 1 名が下がって相手のインサイドフォワードをマークすることによって，最終守備ラインの後方にスイーピングバックを配置することができた」とし，「守備にあたってフォワードがはっきりしたマークの任務を負うようになった最初であろう」と述べ，フォワードに守備の任務が課される初めての守備のシステムであったと指摘している（同前，p. 110）。また多和（1974）は，攻撃において 4 名のフォワードだけではなく，「中盤を受け持つインサイドフォワード，センターハーフはもちろん，スイーピングバックを残してバック陣全員がフォローアップし，厚みのある攻撃を試みる」とし，攻撃においても前段階より，プレーに参加する人数が増えていることがうかがえると述べている（同前，p. 110）。

このような守備を重視したシステムや「マンツーマンディフェンス」を崩すためには，「ポジションチェンジ」を行い，相手守備者を混乱させることが必要である。これを実際に行ったのが，「M•Mシステム」を用いたハンガリー代表であった。当時のハンガリー代表は「マジック・マジャール」という愛称で呼ばれ，4 年間で 1 敗しかしなかったという程の強さを誇っていた。そのシステムの特徴は，攻撃ポジションの選手による「ポジションチェンジ」戦術である（同前，p. 109）。具体的には，「センターフォワードが後方にさがり，代わりに 2 名のインサイドハーフがトップに立ち，相手守備の中心であるセンターバックを迷わせ，同時にハーフバックのポジショニングのとり方にも困難を与えようとする」ものであった（同前，p. 109）。この「ポジションチェンジ」戦術は，攻撃選手には複数のポジションでプレーすることができる技術・戦術の多様化を要求する。このポジションチェンジ戦術における技術・戦術の多様化に攻撃の選手が対応し実行できることによって，「マンツーマンディフェンス」を行う守備者は，いつもと違うポジションでのプレーが要求される。これによって，担当ポジションのプレーに特化している守備者が，通常とは違う役割をこなさなければならなくなり，ポジションチェンジ戦術に適応できる攻撃側に優位性のある状況を作り出していた。このような，攻撃選手の技術・戦術の多様化は，後に攻撃選手だけではなく，守備選手にも求められるようになっていく。

2）システムの誕生がもたらしたもの

以上のように，パスを中心とするゲームの発展は，ゲームにおけるプレーヤーの役割を攻撃と守備に明確に区別するシステムをもたらした。これ以前の初期サッカーでは，試合の進め方であるチーム全体の戦法に特徴づけられるように，ほとんどのプレーヤーの意識が攻撃に向けられていたといえる。それが，パスを中心としたサッカーの発展に伴い，攻撃が多彩になり，それに対する守備の対応が広がり，守備に対する意識がより高まったといえる。こうして，各プレーヤーは攻撃と守備に分かれ，それぞれのポジションにおいてどのようにプレーすることが望ましいのかが問われ，それぞれの専門性を高めることになる。

さらに，W・Mシステムにおけるウイングの選手からのサイド攻撃やボルト・システムのような守備に重点を置きながらの逆襲型の攻撃，M・Mシステムのようにポジションチェンジをしながらドリブル突破やコンビネーションプレーを繰り出す攻撃などが示すように，前段階で示されたサッカーの戦法がパスとの関わりの中で質的に発展し，攻撃者同士や守備者同士，あるいは攻撃と守備のプレーヤー間の関係性や技術・戦術の多様性と向上がもたらされた。

さらに「W－Mシステム」によって「マンツーマンディフェンス」という守備のシステムが向上したことによって，「M－Mシステム」といった「ポジションチェンジ」という新たな攻撃戦術を持ったシステムが生み出されたように攻防の相互作用[3)]によって，システムが発展するといったこと，その中で攻撃の特定のポジションだけができるという専門的なプレーから攻撃における複数のポジションに対応できる技術・戦術の多様化が求められるようになった点は，次の段階への発展を準備するものといえよう。

3－3．全員攻撃・全員守備の誕生と発展

1）中盤重視のシステムの誕生

先述したハンガリー代表のように「W－Mシステム」から「M－Mシステム」という変遷をたどる以外に南米ブラジルでは，独自の発展過程を見せた。それは，「W－Mシステム」から，変形型の「W－Mシステムダイアゴナル」へ発展し，最終的に攻守両面における役割を持つ中盤の選手が生まれる「4－2－4システム」へと発展したのである（ジョナサン，2010, pp. 143-163）。1940年代のブラジルリーグに所属するフラメンゴの監督であるフラヴィオ・コスタは，「W－Mをちょっといじって，彼がいうところの“ダイアゴナル”（対角線）を作った」とし，W－Mシステムの変形したシステムを構築したという（同前，p. 143）。このシステムは，W－Mシステムにおけるハーフバックとインサイドフォワードによって四角形型に形成され，攻撃と守備に役割を分担されているポジションをダイアゴナルにポジションを移動させることによって，攻撃と守備に参加する人数を増加し，両局面における数的優位を創ることを目指す中で生まれてきたシステムであるといえる。つまり，W－Mシステムが攻守の役割を分業化した状態で試合を進めていたのを，数的優位な状況を創りだすために，新たに攻守両面における役割を持つ中盤というポジションを確立していく契機を生み出したといえる。このシステムの特徴は，W－Mシステムの中盤の選手の配置を平行四辺形型に変形したことにあり，右下がり型，左下がり型の2種類があったとされている。このシステムでは，「W－Mシステム」における中盤の選手の役割分担の細分化がなされたと考えられる。すなわち，平行四辺形の上側に位置する選手が主たる攻撃の役割を担い，中間に位置する選手が攻守におけるバランスをとる役割を担い，最後尾に位置する選手が主に守備の役割を担うということである。この役割

分担の細分化は，後のシステムにおける中盤の選手の能力の枠組みにつながったと考えられる（図３）。

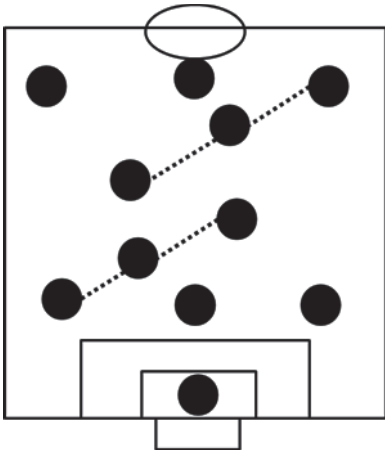

図３　W－Mシステムダイアゴナル

このように，役割分担を細分化する必要性が生じたのは，ブラジル人の即興的なプレー志向の強さに対応するためであるのではないかと考えられる。それは，中盤の選手の役割の枠組みを大きくし，プレー選択の自由度を高めてしまうと，試合の状況に応じて，即興的にプレーすることに慣れている選手にとっては，その枠組みが意味をなさなくなることを意味している。こういったプレーは，華麗なコンビネーションや創造的な攻撃を可能にする半面，攻守における役割が曖昧でフィールド内における規律が明確になっておらず，組織としてプレーすることを難しくするという側面も持ち合わせている。そのため，中盤の選手の役割を従来の「W－Mシステム」よりも細分化し，明確にすることで，組織として試合でプレーしやすいようにする必要があり，このようなシステムの変更が行われたのではないかと考えられる。ブラジル固有の個性的なサッカーへの対応として生まれたシステムであったが，中盤の選手の役割を明確にした意味は大きいように思われる。

このような変遷をたどる中で，ブラジルは1950年の自国開催のワールドカップと1954年ワールドカップで敗退してしまう。敗因として，技術的に熟達したブラジル選手による攻撃や守備のプレーにおいても，分業化され，数的優位な状況を創りだすシステムの構築が無ければ，試合や大会において好成績が望めなくなったことを示していると推察される。そのため，このような課題に対応するためにどのようにして攻撃・守備において数的優位な状況を創りだし，自分たちの持っている技術や戦術を発揮していくのかというシステムの構築が必要であった。こうした中で，ダイアゴナル型を変形し，システム的志向性を明確にした「４－２－４システム」が誕生した。「４－２－４システム」の特徴は，従前のシステムが「攻守分業」でシステムを構成していたが，「４－２－４システム」では数字の表記が示すように，攻守両局面に役割のある中盤というポジションが確立され，攻守両面において数的優位を創りだすシステムを構築した点にあった。そのため，中盤の選手は，先に述べた「ダイアゴナルシステム」において示

された中盤選手の攻撃的にプレーすること，攻守のバランスを取ること，守備的にプレーすることの全てをこなす必要があった。さらに，このシステムでは１．中盤の選手の攻撃参加，２．サイドバックの攻撃参加の方法であるオーバーラップ等を用いた数的優位な状況を生み出すサイド攻撃，３．ペレ[4)]を代表とするブラジル人選手特有の個人技術の高さの三つを持って攻撃を展開していることも特徴の１つである。ブラジルでは，このような背景から４バックシステムが使用されていく。

他方，ヨーロッパでは，次第に４バックシステムが変化していく。

「４－２－４システム」において，バックスが横に並ぶことは，守備の厚みがなくなり，突破力のある相手の対応が困難である。それゆえ，ゴール前をよりいっそう固めるために，「４名のバックスの後方にもう１名のプレーヤーを配して二重に守備を構える」システムが誕生した（多和，1974，p. 112)。この最後尾のバックスを，「ゴール前をきれいに掃除してしまう係と見なして『スイーパー Sweeper（掃除する人)』」と呼び，「スイーパーシステム」が誕生した（多和，1974，p. 112)。このシステムの誕生の背景について多和（1974）は，「1960年代にヨーロッパで守備を固めるサッカーが重んじられ，守備に際してその局面での数的優位を重視する傾向が強くなるにつれ，ゴール前の守備についてもこの考え方がとられてスイーパーシステムの採用となった」ことを挙げている（同前，p. 113)。

「スイーパーシステムは守備の強化をもたらしたが，他方，攻撃力の低下を招いてしまったという反省」から「４－３－３システム」が生まれた。このシステムは，「４名のフルバックラインと３名のハーフ陣で守備を固め，攻撃にあたっては３名のフォワードとハーフ陣の３名が中心となり，ときにはフルバックがオーバーラップして最前線まで進出して攻撃に加わったりし，攻守にわたる強力なバランスのとれたシステム」であるとされている（同前，p. 114)。

このように「攻守のバランス」を模索していく中で，守備重視の考え方からイタリアでは「カテナチオ」と呼ばれるシステムが誕生している。「カテナチオ」の特徴は，「チーム全体を自陣に引かせて，敵を誘い出し，余っていた選手が攻撃に出るように仕向けて，カウンターアタックに無防備な状態」を意図的に作り出し，攻撃・守備を展開するシステムである（同前，p. 220)。「カテナチオ」の起源は，ジョナサン（2010）によると「カール・ラッパンの考案したシステムにあるとされている（同前，pp. 213-215)。しかしながら，ラッパンのシステムの短所は，センターハーフの負担が大きく，「中盤を敵に明け渡すことが多かった」ことであった（同前，p. 215)。この課題は，自チームの「インサイドハーフが徐々に下がってセンターハーフと並んでプレーするようになった」ことや「フルバック二人（事実上のセンターバック）のうち一人がもう一人の後ろに下がり，オーソドックスなスイーパー」になるというシステムの発展により解決された（同前，p. 216)。しかし，ラッパンが用いたシステムはあくまでも，戦力的な弱者が強者に勝つために使用される手段であった。この「カテナチオ」が，強豪によって用いられ主流になったのは，エレーラが率いた「ラ・グランデ・インテル」の時であるとジョナサン（2010）は指摘している（同前，p. 218-226)。エレーラのシステムの仕組みは，「中盤を１人減らしてディフェンスラインの後ろにスイーパーを置き，レフトバックが自由に攻撃参加できるようにした」こと，攻撃の際は「猛スピードで縦に攻め上がり，三本以内のパスで相手ペナルティーエリアまで持ち込む」ことであった（同前，p. 233)。パスの方向についても縦に攻めているあいだにボールを奪われても問題ないが「横パスの途中で奪われたら，失点の代償を払うことになる」とし，縦に早い攻撃すなわちカウンターアタックを展

開しようとしていたと理解できる（同前，p. 233)。この戦術を用いてインテルは，素晴らしい成績を収めたが，戦術的な問題点としてラッパンの時と同じように「中盤を制圧されてしまう」という問題は解決されていなかった（同前，p. 244)。

この問題は，守備専門の選手であったリベロの選手を攻守両面において「バランスの取れた選手」に変更し，守備以外の役割として「味方がボールを奪ったときにバックラインから前に出て中盤でプレーできる」ことを新たに位置づけたことにより改善された（同前，p. 332)。しかしながら，このシステムにおいても欠点が生まれることになる。具体的には，このシステムは非対称のシステムであることに原因があったとジョナサン（2010）は指摘し，「彼らの非対称なシステムがうまくいったのは，誰もが同じように非対称的なシステムだったからで，マークの分担もW－Mの場合と同じくらい具体的であった」ことを理由として挙げている（同前，p. 335)。そのため，相手に合わせてマークをずらしてしまうことで自己のシステムのバランスが崩れることが欠点であった。

一方，ソビエトではヴィクトル・マスロフが，ブラジルの４－２－４システムを参考に，４－２－４システムのウイングの選手を後ろに下げたフォーメーションである「４－４－２システム」を考案した（同前，pp. 195-200)。そして，マスロフが採用した「４－４－２システム」の特徴は，プレーメーカー（司令塔）を採用するため，「ゾーン•マーキング」を採用したこと，「４バックの前に位置し，ソヴィエト・フットボール初の中盤に守備的ミッドフィルダー」を配置したことにある（同前，pp. 204-206)。このシステムの表記は，現代的にいうと「４－１－３－２」という中盤の形がダイヤモンド型のフォーメーションになる。そして，戦術的な特徴は，「４－２－４」システムを参考に「ゾーン•マーキング」と中盤の選手による「プレッシング」を導入したことである（同前，pp. 206-210)。

また，南米においてもファン・カルロス・ロレンソが，アルゼンチン代表の監督に就任した際に1966年のワールドカップ期間中において，「その後アルゼンチンの標準的なフォーメーションとなる４－３－１－２を初めて実施した」とされている（同前，pp. 257-258)。このシステムの中盤の選手の配置と役割については，「本質的に中盤はダイヤモンド型」の選手の配置であり，１人のミッドフィルダーの選手がダイヤモンドの先端で，プレーメーカーとなり，その横で「カリレーロ」と呼ばれる左右のミッドフィルダーが上下動を繰り返し行い，さらに，サイドバックの選手がオーバーラップを用いて前線に進出することにより攻撃の幅を確保するというシステムであった（同前，p. 258)。

このように様々なシステムが中盤に攻守両面における役割を持った選手を重要視する中で，サイドバックの攻撃参加やリベロの攻守両面での役割が求められていったように，攻守両面のオールラウンドな能力が次第に様々なポジションに波及していくが，1974年に「全員攻撃・全員守備」の完成形の１つの到達点が出現する。それが，トータル・フットボールである。この用語は「1974年ワールドカップの代表チーム（オランダ）のチームパフォーマンスに反応して誕生」した用語であり，トータル・フットボールの父はリヌス・ミケルスである（同前，pp. 282-290)。トータル・フットボールの特徴は，４－３－３のフォーメーションを用いた「全体規模のポジションチェンジ」，「プレッシング」，「積極的にオフサイドトラップをかけること」であった（同前，pp. 275-288)。「ポジションチェンジ」は，「横の移動よりもむしろ縦の移動であったこと」が革新的であり，主に中盤と両サイドで行われていた（同前，p. 288)。そして，この「ポジションチェンジ」を可能にする，ディフェンスラインの押し上げが，攻撃中

にボールを相手選手に奪われた時にも「プレッシング」を実施することを保証し，相手に正確なパスを出させないという守備の戦術も担っていた（同前，p. 288)。このような激しい動きを持続させることができた背景には，栄養面やスポーツ科学の発展による，選手自身の身体的な能力の向上があげられ，これがフットボールの発展に関係しているとジョナサン（2010）は指摘している（同前，p. 276)。

また，個人技術と戦術的補完性を重視したブラジルでは，システムよりも個人の能力を重視したチームが登場した。それは1970年にワールドカップを制したブラジル代表である。このチームは「最高の選手をピッチに放り出して，ただプレーするように指示するだけでこれほどの成功を収めるチームは，２度と現れないだろう」とジョナサン（2010）が指摘しているほど，個の力の高いチームであった（同前，pp. 325-326)。この指摘からもわかるように，具体的な選手の配置や戦術については，「現代の言い方をすれば，おそらく４－２－３－１といえるだろう」が，「そのような細かい区別はなんの意味を持たなかった」とし，フォーメーションや戦術よりも選手の能力に依存していたと捉えることができる（同前，p. 327)。そのため，戦術は「ピッチ上の選手が互いに申し分なく補完」できる「ポジショニング」にあると考えることができる（同前，pp. 325-327)。このように，システムによって選手に役割を与えるというより，才能のある選手のクリエイティヴィティ―と技術によって「全員攻撃・全員守備」を達成するという考えから1982年のブラジル代表は,「才能あふれるクリエイティブなミッドフィルダー」の能力を発揮させるため,「４－２－２－２」というフォーメーションを使用した（同前，p. 330)。このシステムは，サイドにいる選手が表記上サイドバックしかいないため，広がりに欠けているように捉えられるが,「このチームにおいてはボールを持っているときは非常に流動的かつ落ち着いているため，動くことにより広がりを作り出していた」とされ,「決して広く普及することのないシステムだった」といわれるように当時のブラジル代表選手の能力だからこそ，実現可能なシステムであった（同前，p. 331)。このように優秀な攻撃的選手，すなわち，プレーメーカー（マラドーナ[5)]）をどのようにシステムに位置づけるかを検討することで生まれたのが，1986年にアルゼンチン代表が用いた３バックの３－５－２システムである（ジョナサン，2010，p. 336)。その特徴は，当時の他のチームには純粋なウイングのポジションが欠如していたため，フルバックの必要性を見直したこと，フルバックがより攻撃的なポジションとして変化してきたことを受け，フルバックの選手をワイドなポジションのミッドフィルダーとしたことであった（同前，p. 338)。このようにして，特定の優秀な選手の能力を最大限に発揮できるようなシステムを考案していく過程が現れてくる。

２）全員攻撃・全員守備に向かうシステム

以上のように，この段階では，攻撃と守備の両局面に役割を持った中盤の選手が誕生する。これにより，攻撃と守備に関与する人数が増大する。つまり，前段階のＷ・Ｍシステムが，攻撃が５人，守備が５人であったのに対し,「４－２－４システム」では，前線の４人と中盤の選手２人の６人，守備においても後方の４選手と中盤の選手２人の６人によって守備を展開されている。このようにして，攻撃と守備の両局面において役割を担う中盤の選手が「４－２－４システム」以降,「４－３－３システム」,「４－４－２システム」,「３－５－２システム」といったように次第に中盤の選手が増加していく過程が見られる。これは，試合において選手が攻守両面でプレーすることの重要性が増大していることを示しているといえる。このような

能力を持つ選手を重視することは，攻撃と守備をつなぐ局面である「攻守をつなぐ局面」の重要性が，サッカーにおいて新たに示されたと考えることができる。そのため，これは攻撃と守備の両局面を主とした従来のシステムから，「攻守をつなぐ局面」を取り入れた新たなシステムの構築がこの段階では求められたことを示している。

さらに，中盤の誕生は「カテナチオ」や「リベロ」の誕生が示すように，守備者に対しても守備を専門とするプレーだけでは無く，攻撃への参加が求められた。また，フォワードの選手にも攻撃だけではなく，守備の選手の攻撃参加を補う役割も担わされていく。このように中盤の選手が増大することで，次第にディフェンスの選手とフォワードの選手に攻撃と守備の両局面における技術や戦術の習得が要請された。例えばそれは，攻撃においてサイドバックの選手がオーバーラップを用いてセンタリングを上げるなど，従来はフォワードウイングが担っていた役割をサイドバックの役割をこなしながらプレーすることや，守備においては攻撃の専門家であったフォワードを含め，ミッドフィルダー，ディフェンダーの三層によるチーム全体で守備を展開することである。そのため，前段階における攻撃と守備の技術・戦術の多様化は攻撃と守備に分断されていたがこの段階では，攻撃と守備をつないだオールラウンドプレーが選手に要求されるようになった。

また，サッカーにおける基本的な戦法も，サイド型の攻撃をサイドバックの選手が担うようになったことやプレーメーカーといった優れた個人の選手を効果的にシステム内に位置づける新たなドリブル型の構築やカテナチオのような逆襲型に見られるように質的発展を遂げている。

このように，攻撃・守備における数的優位の必要性から，攻守両面において役割を持った選手が登場し，それがやがてフィールド全体の選手へ波及していくシステム，「全員攻撃・全員守備」の構築へと発展していった。このような攻守両面における能力を持った選手が多数生み出されていく中で，選手全員が攻守において絶え間なくプレーすることができるようになり，攻撃と守備の両局面における質が高まった。

しかしながら，攻守に参加する人数の増加だけでは次第に困難が生まれるようになってくる。その問題を解決するため新たなシステムの構築が目指されるようになった。

3－4．攻撃と守備の一体化

1）守備と攻撃の一体化

クラブチームやナショナルチームにおいて，「全員攻撃・全員守備」という方向性からシステムが発展してきたが，1980年代末に転換が起きる。それはアリーゴ・サッキが1980年代末にACミランで実践し，成果を挙げた「ゾーンプレス戦術」である。その方法は，相手チームを「ディフェンスラインとフォワードラインのあいだのスペース」押し込み，なおかつ「オフサイドトラップ」を仕掛けることにより，ディフェンスラインを高く保ち，相手にプレーするスペースと時間を与えずボールを奪い，そこから，攻撃を仕掛けるといった方法であった（ジョナサン，2010，p. 389）。さらに，守備をしている時は，「ボール」「スペース」「対戦相手」「チームメイト」を動きの基準とし，この4つの基準から自己のポジションを決定するようにしていた（ジョナサン，2010，p. 395）。また，プレッシングの種類についても主導権争いを目的とした「部分的なプレッシング」，ボールを奪うことに主眼を置いた「トータルプレッシング」，守備を立て直す時間を作る「フェイクプレッシング」の3つから「ゾーンプレス戦術」

が成り立っている（ジョナサン，2010，p. 396)。さらに，ディフェンスラインについては,「基本的には四人のディフェンダーが一列に並び，弧を描き，ボールがフィールド中央にある時だけフラット」な状態を作ることを試合中に絶えず行うことが必要であったとしている（ジョナサン，2010，p. 396)。また，攻撃時は,「ゾーンプレス」でボールを奪うため，相手・味方選手の距離が近くなり，時間と空間がない状況でプレーしなければならなかった。そのため，ボールを奪ってから攻撃の準備をしていては時間がかかりすぎてしまうため，守備をしながら攻撃の準備をする必要性があったと考えられる。このように，ここからのサッカーは，相手選手からボールを奪った後に攻撃のことを考えるのではく，攻撃を優位に進めるために相手陣地でチームとして意図的にプレッシングを仕掛け，相手選手からボールを奪い，ショートカウンターを仕掛けるといった守備と攻撃を同時に考えるという「守備と攻撃の一体化」の段階に入っていく。さらにこれに拍車をかけるように1993年にゴールキーパーへのバックパスが禁止され，過度な守備的なプレーや時間稼ぎが制限されるようになり，さらに後方からのチャージングの規制の強化といった守備面に関するルールの改正がなされることで，攻撃が優位になるようになった。これにより，サッカーはより高速化の道へとシフトしていき，2002年のワールドカップまではボールを奪ってから15秒以内の勝負と呼ばれるほど攻撃が高速化していった。また，この年代から,「ワントップシステム」といったフォワードのプレーヤーが１人のシステムも登場するようになっていく（図４)。

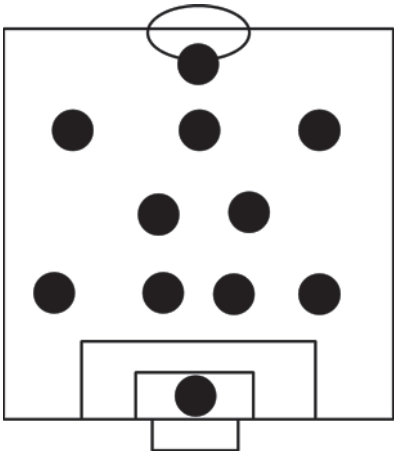

図４　ワントップシステム

しかし，次第にこのような傾向に変化の兆しが現れてくる。それは，2006年ドイツワールドカップである。この大会は,2002年にトレンドになった「ボールを奪ってから15秒以内の勝負」が，守備方法の変化によって封じられるようになった大会であった。具体的には攻撃のスピードを遅らせ，守備側は自陣にリトリートし，ミッドフィルダーとディフェンスによる守備のブロックを形成することで守備を強固にする新たな方法である。これによって，攻撃は強固な守備組織をコンビネーションあるいは個人のドリブル突破によって打開する方法をとらなければならなくなった。そのため，2006年には，新たに攻撃における「モビリティー」の重要性が問

われるようなった。しかし，この大会では新たな攻撃方法は提示されたとは言えず，守備が優位に立っていた。EURO2008において優勝したスペイン代表によって，はじめて新たな戦術的な視点が提示された。それは，ボールポゼッション中に守備の組織を整えるという「攻撃と守備の一体化」という観点の導入である。これは換言すれば「切り替えの概念の進化」ともいえる（日本サッカー協会技術委員会テクニカルハウス，2010，p. 9）。この大会で，優勝したスペイン代表は「自分たちでボールと人が動く中で相手の隙を意図的につくり出し，得点に結びつける力」，「ボールを失ってからの前線からのプレス」，「時間帯によって，守備組織を自在にコントロールできていたこと」が特徴として挙げられている（日本サッカー協会技術委員会テクニカルハウス，2008，pp. 8-16）。この傾向がさらに強まるのが，2010年南アフリカで開催されたワールドカップである。この大会において上位に進出したチームの特徴として挙げられていたことは，「攻撃をしながら次の守備への備えをしている」「守備をしながらすでに次の攻撃への準備をしている」ことであった（日本サッカー協会技術委員会テクニカルハウス，2010，p. 9）。そして，2012年ウクライナとポーランドで共同開催されたEURO2012でもこの傾向が継続されていることが報告されている。その中でも，優勝したスペイン代表の特徴としては，流動性の高い攻撃の中で「エリア」「ゾーン」から規定される異なる役割と責任を果たすことが上位進出に重要であることが示されている（日本サッカー協会技術委員会テクニカルハウス，2012，p. 4）。加えて，サイドからのセンタリングによるサイド攻撃も現代サッカーにおいて有効な方法であることも報告されている（日本サッカー協会技術委員会テクニカルハウス，2012，pp. 8-10）。このように現代のサッカーではボールを保持することによって主導権を握りながら，守備の組織を整え，得点を奪うといった「攻守一体型」となったサッカーが展開されている。

2）現代サッカーシステムとしての攻守一体型

このように，「ゾーンプレス戦術」の誕生により，敵味方の両方のディフェンスである最終ラインが上昇し，フィールドをコンパクトに使うサッカーが展開される。これに伴い，プレーエリアが極度に圧縮され，時間的・空間的余裕のないプレーが選手には要求されるようになる。そのため，守備でボールを奪ってから攻撃へと展開するといった従来の攻守の関係では，攻撃に転じる前に相手選手からプレッシャーを受けてしまうといった，攻守の時間差をどのように発展させるかが問題となった。その解決方法として，守備を展開する中で攻撃者は次の攻撃を準備するポジショニングを取り続けるといった「守備と攻撃の一体化」という新たな攻守の関係が創造されるようになった。すなわち，攻撃と守備の局面を連続して交替するものとして捉えるではなく，一体化しているものとして捉え，守備の戦術と攻撃の戦術を結び付けることを重視するシステムの構築の必要性を示している。

このようなサッカーにおけるプレーの高速化が進む中で，次第に守備の方法が変化し，攻撃の速度を緩め，自陣で守備を固めるといった「守備ブロックの形成」により，スピードが落とされた状態で相手の守備を崩すことが攻撃に求められるようになった。この解決方法として，新たに出てくるのがパスを回し攻撃を展開する中で守備を組織するといった「攻守一体型」のサッカーである。これは，従来の攻守における技術や戦術の考え方の転換を生んだといえる。具体的には，パスの意味の変化である。これ以前のパスに付与されていた役割は，相手守備の隙を創り，局面を打開するといった攻撃に関する役割であったが，ここでは，守備のシステム

整備するために連続してパスを回し，時間を創出するために使うといった攻守両局面における役割をパスに付与している。すなわち，攻撃・守備の技術や戦術を，その局面に限定して使用するのではなく,両方の局面において使用することを求められることを示している。そのため，ドリブルやキックなどの攻撃の技術や戦術を攻撃面に限定して捉えるのではなく，各技術や戦術が攻撃と守備において，それぞれどのような役割を担った存在なのかを充分に理解した上でシステムに位置づけることが重要になる。

さらに，攻撃･守備の両方をプレーすることはもちろんのこと,「攻守一体型」ではポジショニングが流動的であるため，様々な「エリア」や「場所」から規定されるプレーをこなさなければならず，前段階の攻守におけるプレーの多様化に「エリア」や「場所」といったフィールドからの要求も含めた技術や戦術を発揮することが求められるようになったといえる。それに加え，体力的な向上も要求される。

また，サイド型によるセンタリング攻撃の有効性や逆襲型におけるゾーンプレスとショートカウンターの一体化，組織化された守備が展開されるため，時間的・空間的余裕がない中で個人の力で守備を崩す方法といったドリブル型，パスを回す中で守備を構築するボールポゼッションをシステム化するパス型といった戦法の質的な発展も見られる。

4．まとめ

本研究では，サッカーの戦法・システムの歴史的発展過程を検討した結果，次のようなことが明らかになった。まず，1850年代から1925年までの初期サッカーの段階では，多様な戦法が地域毎に存在し，各地域でのサッカーがＦＡに集約される中で「パス」を中心とするサッカーが優位性を発揮するようになる。ついで，1925年のオフサイド・ルールの改正も相まって，攻守の役割を明確にする「攻守分業制」のシステムが構築される段階に至る。そしてさらに，この「攻守分業制」が進んでいくと次第にこれを崩そうとする新たなシステムを構築する必要性が高まり，攻守両面において役割をもつ中盤のポジションがシステム内に確立され，それがフィールドの選手全体へ波及していく「全員攻撃・全員守備」の萌芽が1950年に生まれ熟成されていく。そして第四段階として，1980年代末に「ゾーンプレス戦術」を導入されたことにより，両チーム間が30m内に収まる時間的・空間的余裕の無い戦いが展開される「守備と攻撃の一体化」が生まれ,「15秒以内の勝負」という高速化した戦いが展開される。このような傾向が続く中で，第五段階として，2006年のワールドカップが転機となり，2008年のEUROにおいて開発された新たなシステムである「攻守の一体化」する現代サッカーのシステムが誕生し，今もなお進化し続けている。

これらの発展段階は，次のような意味を示しているといえよう。

1）初期サッカーにおける主要な戦法は，その後のサッカーの基礎的な戦法や戦術となっており，それらの多様な組み合わせによって新たな戦法・戦術の開発に生かされており，サッカーの基本戦法・戦術と位置づけることができる。

2）システムが生まれる第二段階では，攻守の役割を明確にし，システムという全体の共通目標の共有によってプレーヤー間の連携(関係性)が意図された。その中で個々のプレー

ヤーの技能的能力が高まってきたことが示された。したがって，攻守の専門性と両者の関係性（連携）を理解することがサッカーの習熟にとって不可欠であるということである。

3）さらに現代サッカーに接近するためには，第三段階以降に示される攻守にわたる技術・戦術・戦法がフィールドプレーヤーすべてに求められ，その実戦を可能にする体力を含めてオールラウンドな能力が必要になっているといえよう。

このような戦法及びシステムの歴史的発展過程が示す各段階の意味は，より詳細な技術や戦術内容を考察し，技術•戦術構造を構築することが，次の課題として残されている。

注

1 シェフィールドFCとは，1957年に創立された世界最古のフットボールのチームであり，1850年代のイングランド北部のフットボール文化の中心的役割を担っていたチームである（Harvey，2001）。

2 パスサッカーと記述されているが，当時の試合の正確な内容までは，本研究において対象とした先行研究では示されていない。そのため，パスサッカーというものがどういったものであるかは，正確には把握できないが，先行研究の記述を参考にするとキックアンドラッシュ的なサッカーが展開されていたのではないかと推察される。

3 攻防の相互作用について久世は「球技における諸種目の戦術を最初に特質付けるのが，攻撃側の得点行動に対する反撃行動である。その後攻撃戦術は防御戦術が反撃行動へ移行することによって，必然的に質的発展を引き起こす。さらに攻撃戦術の発展が防御戦術の発展を促す」と述べている（久世，1998）。本論でもこの論述に依拠する。

4 ペレとは，ブラジル代表であり，生涯で1281ゴールを記録し，サッカー選手に必要な才能を全て持ち合わせていたとされ，サッカーの王様や20世紀最高の選手とも呼ばれている（サッカー批評，2008，p．202）

5 マラドーナとは，アルゼンチン代表であり，1982年メキシコワールドカップで５人抜きドリブルからの得点や神の手ゴールを決めた選手であり，彼を止めるにはファウルするしかないとまで言われた選手である（サッカー批評，2008，p．203）

文献

Harvey, A.（2001）‘An Epoch in the Annals of National Sport’: Football in Sheffield and Creation of Modern Soccer and Rugby, THE INTERNATIONAL JOURNAL OF THE HISTORY OF SPORT, pp. 53-87.

Harvey, A.（2005）Football: The First Hundred Years The Untold Story. Routledge.

FAカップの結果 http://www.thefa.com/Competitions/TheFACup/Archieve（閲覧日2013年３月７日）

ジョナサン・ウィルソン：野間けい子訳（2010）サッカー戦術の歴史－ ２－３－５から４－６－０へ－．筑摩書房.

クリスチャン・エイゼンベルグ，ピエール・ラフランチ，トニー・メイソン，アルフレッド・ウォール：小倉純二，大住良之，後藤健生日本語版監修（2004）フットボールの歴史．講談社.

久世たかお（1998）ラグビー・フットボールの指導について．北海道大学教育学部紀要75：253-277.

Taylor, M.: 池田恵子訳（2012）Eton versus Sheffield: Revisiting the Debate on the Origins of

Association Football. 体育史研究第29号, pp. 41-53.
Muray (1996) The World's Game. University of Illinois.
大村平 (1971) システムのはなし－複雑化・多様化へのチャレンジー. 株式会社日科技連出版社：東京.
サッカー批評編集部 (2008) ワールドサッカー歴史年表. 株式会社カンゼン：東京.
多和健雄, 長沼健, 長池実, 鈴木嘉三, 畑山正 (1974) サッカーのコーチング, 大修館書店.
Mason, T. (1980) Association Football and English Society 1863-1915. THE HARVESTAR PRESS.
内山治樹 (1996) 日本とドイツにおける球技戦術の理論分析. 埼玉大学紀要, 教育科学, 45(2), pp. 39-56.
財団法人 日本サッカー協会 技術委員会テクニカルハウス (2008) UEFA EURO 2008 JFAテクニカルレポート. 財団法人日本サッカー協会：東京.
財団法人 日本サッカー協会 技術委員会テクニカルハウス (2010) 2010 FIFAワールドカップ南アフリカJFAテクニカルレポート. 財団法人日本サッカー協会：東京.
財団法人 日本サッカー協会 技術委員会テクニカルハウス (2012) UEFA EURO 2012 JFAテクニカルレポート. 財団法人日本サッカー協会：東京.

Reconsideration on the Historical Development Process of Tactics and Systems in Soccer

Ryohei SATO

Key Words

Soccer, System, Tactics, Historical Development

Abstract

The purpose of this study was to reconsider the historical development process of the systems and tactics in soccer. The analysis period is from the 1850's to modern times. As a result, the history of soccer was divided into five stages from the qualitative difference of the tactics and systems. The first stage was mainly used Pass soccer (1850's to 1925): soccer was played at several regions which has unique rules. In addition, the characteristics of this stage had no systems. Therefore, tactics of soccer differed by regions. The second stage was separation of offense and defense (1925 to 1950): this stage provided the role of the offense or defense with players. Therefore, the characteristic of this stage was the creation of separation systems. The third stage was principal of all players offense position.all players defense (1950's to 1980's): this stage was established of the Midfielder in the system. The role of this position was both offense and defense. Then this role was spread to the several other positions. The fourth stage was principal of integrational defense tactics and offense tactics (1980's to 2008): this stage signify that defense phases include offense phases. Additionally, this stage born zone-press tactics. In addition, zone-press was used with the shot counter-attack. Therefore, characteristic of this stage was playing defensive tactics, while on the other hand played the offensive tactics. Last stage was the integration of both offense tactics and defense tactics (2008 to 2010): this stage meant attack tactics including the defense position. Then, this stage established ball possession tactics. This tactics had the role of organization to the defense positon. Therefore, the characteristic of this stage was used as a system of the ball possession tactics which was had the defensive role in the attack.